

今月の花

夏の夕暮れを彩る「一夜花」 細江久美子（撮影・文）

レモンイエローの明るい花色はどこか寂し気でもあります。軽井沢周辺に自生するユウスゲは、アサマキスゲとも呼ばれています。



撮影 夏の盛りに 軽井沢町内にて

今月の詩

水に傷ついた子供のカシーダ（部分） ガルシア・ロルカ

わたしは井戸に降りて行きたい、
グラナダの壁をよじり登りたい、
水の暗い錐（きり）で
刺し貫かれた心臓を見つめるために。

霜の冠をかぶって
傷ついた子供が呻いていた。
池や天水溜めや泉たちが
風に向かってそれぞれの剣を振りあげていた。
ああ なんとという愛の怒り、何と人を傷つける刃、
何という夜のざわめき、何という白い死だろう！
何という光の砂漠が
暁の砂地を徐々に沈めていたことか！

子供はひとりぼっちだった
その子の咽喉の中には眠る町。
夢からほとぼしる噴水が
子供を水草の飢えから守っている。

『ロルカ詩集』小海永二訳（世界現代詩文庫）より

ゆあさとしお（選・文）

長い間スペインでは、ロルカの詩を読むことは禁忌（タブー）であった。しかし、その間も日本の天本英世はロルカの詩を、日本語とスペイン語で朗読し、彼の作品の魅力を発信しつづけた。

1975年の秋に、私は天本の朗読を神保町のホールで聞き、深い感銘を受けた。年が明けた早春にグラナダを訪れる。偶然にもロルカを抹殺したフランコは前年に亡くなっていて、ロルカ作品はすでに解禁され、美術館は還ってくるピカソの絵を迎え入れる準備をしていた。

ガルシア・ロルカはグラナダに生まれ、「スペイン市民戦争（内戦）」でファシストに殺された。

彼は子どもや動物たちやフラメンコをこよなく愛し、ジプシーやアラブ人への差別を嫌う。水と夜と子どものイメージを好んで謳う。生と死とつかの間の燦めき。それはフラメンコのテーマそのものであり、ロルカの生涯を暗示している。

フェデリコ・ガルシア・ロルカ（1898—1936）
スペイン・グラナダ生まれの詩人・劇作家。
フラメンコを愛した。

コロナ禍の学校生活

渥美 卓哉（都内小学校教諭・こども支援士）

○いつもと違う新年度のスタート

2020年度（令和2年度）4月8日、私が勤務する小学校で、始業式が行われました。単学級で小規模校な自校ですが、コロナウイルスの影響により、校庭での始業式も子ども達の間隔を十分に取って、全員マスク着用という形で行われました。まだ緊急事態宣言の真っ只中であつたゆえに、新年度の学級の時間は新しい学年と新しい担任の顔合わせのみとなりました。始業式後は各教室に集まり、担任からの簡単な挨拶と、今後の予定の話、数日分の課題、そして新しい教科書を配布し、すぐに下校となりました。また、東京の感染者数が多いことの懸念から、地方の親戚の家に避難している子ども達も幾人かいて、全員出席での始業式とはなりませんでしたが、子ども達は、久しぶりに会った友達と談笑する姿が見られ、つかの間の再会を喜ぶ姿が見られました。

始業式以降は休校となり、子ども達の学習は自宅で行うこととなりました。教員は始業式前に数日分の課題を用意し、翌週からは学校のホームページ上に時間割と課題を提示し、家庭で学習を進められるようにしました。教員も自宅勤務が可能となり、毎週金曜日に教員全員が出勤する以外は、自宅から学校のネットワークにアクセスして時間割と課題を作成することとなりました。また、その日に児童の健康確認を兼ねて家庭に1件ずつ電話連絡を行いました。

○休校中の学習

私は今年度、算数少人数の担当のため、1年生から6年生まで、毎日の算数の課題を作成しました。当初は、新学年の学習はまだ進めないということだったので、前年度からの未履修の単元や、前学年の復習などを作成しました。最初は課題作成も手探りで、家庭でプリントアウトできない家庭もあるかもしれないということで、印刷した課題をゆうパックで郵送しました。ただ、単学級とはいえ、全教科の一週間分の課題を袋詰めするのはとても大変な作業で、大規模校であれば難しいことだと感じました。その後は、プリントアウトできない家庭はノートにやるなどの対応をして進めました。

新学年の学習を始める際には、動画のコンテンツを活用したり、教科書会社のHPにあるまとめプリントを活用したりするなどしました。毎日の課題をつくる上で一番苦労したのは、家庭でも子どもが学習内容を理解しやすくなるためにはどのような課題を作ったらよいか、ということでした。「教科書の何ページを読み、何番の問題を解く」というだけでは、文章を読み取る力が弱い子には厳しくなります。その中で、動画コンテンツはとても有効でした。そのほかにも、普段の授業ではあまりできない、「算数と生活をつなげる活動」を課題に出すことができました。例えば、2年生の長さの学習では、家の中で一番長いものを見つけたり、5年生の比例では、日常の中の比例を見つけたりするなど、教科書内で終わってしまいがちな算数の学習の幅を広げることができました。5年生のある子は休校が明けた後、提出したノートに、「比例を探すのが楽しかった。意外に身近にも比例があることがわかりました」と感想を書いていました。

○オンライン朝の会

5月の下旬ごろには、Zoomを活用して、学級の朝の会を始めました。幸いにも、保護者へのメールアンケートで自宅にインターネット環境がないという家庭はなく、スムーズに始められました。子ども達の顔が画面に映り、会話でのやり取りができたときに、ようやく教師らしい仕事ができたと感じました。家庭の協力も有難かったです。また、子ども達もPCやスマホの扱いに慣れている子も多く、学校でももっと子ども達にICT機器を活用できる環境を整えば、学習の幅はもっと広

がると改めて感じました。

○分散登校開始

5月25日、緊急事態宣言が解除されました。それに伴い、6月から分散登校が開始されることとなりました。学級をAグループとBグループに分け、1日ずつ交互に登校する方式をとりました。子ども達は久しぶりの登校で友達に会えたことはうれしかったようでした。しかし、いつもと違う学校の雰囲気、元気に過ごすというよりは、ひっそり過ごしているという様子でした。ただ、久しぶりに授業を受けることができたり、休み時間に校庭で遊んだり、自宅にずっとこもっていたころよりは活発に過ごすことができたのではないかと思いました。少しふくよかになったと感じる子が多くいたのは少し気になりました。分散登校中は給食もなく、午前授業で下校となりました。これが2週間続きました。

○全員登校開始

6月15日からの一週間、午前授業ではありましたが、全員登校が開始されました。机は一人一人なるべく離し、給食の時間もその状態のまま会話をせずに食事をとりました。また、分散登校時からのマスクの着用や、登下校した休み時間などの消毒、ソーシャルディスタンスなどの新しい生活様式は引き続き指導していきました。授業も通常に戻りましたが、音楽の時間は歌唱指導を行わない、体育は接触を避けたり、個人で行える運動をするなど制限がありました。

そして、6月22日から通常の学校生活がはじまりました。この頃から、子どもたちの様子は、いつもの様子に戻り、友達と楽しく談笑したり、校庭で元気よく遊んだり、授業も以前と同じように取り組む様子が見られるようになりました。ただ、そうなってくると、ソーシャルディスタンスなどの徹底は難しいなと感じるようになりました。

〈最後に〉

1学期は当初オリンピックの予定もあり、7月の初旬に夏休みに入る予定でしたが、コロナの影響により7月31日が終業式となりました。そして、8月24日から2学期が始まります。また、7月から隔週の土曜授業が3月まで続くこととなり、振替の休みもないため子ども達への負担が増えています。それにストレスを感じ、相談してくる子もいました。今後もコロナの影響は続きそうです。それでも、日々の中で子ども達一人一人が成長を感じられるようにしていけたらと思っています。(了)

実践報告 II

東京の片隅の学童保育所から

山上 和子 (東久留米市学童保育所元職員・こども支援士)

〈はじめに〉

新型コロナウイルスの感染拡大で小学校が一斉休校となった2020年3月のはじめから、学童保育所(以下、「学童」と表記)では、朝8時15分から夕方6時までの「一日育成」が始まった。保護者の勤務が自宅待機になったり、テレワークになったり、祖父母宅に避難したり、感染を心配して兄弟で留守番したりして、子どもたちの出席は半分ほどになった。(在籍百人で、ふだんの出席が75～80人程。この3月は、40～50人位の出席であった)しかし一日の半分以上は広くはない室内で(言わば密に)過ごさなければならない。

しかし「学童」という成長環境は、保育園、家庭や学校と同様に、「密」が基本であり、「人と関わって過ごすこと」の中で、子どもの人間関係の土台が形作られる。人に対する愛情や信頼を学び、関係の持ち方、すなわち人との適正な間のとり方やトラブルが起きた時の対処の仕方も学ぶ。「密で暮らす」ことで、子どもは成長する。

以前は、おやつや学習など、必要に応じて5～6人で座るように、テーブルを出したり、片付けたりしていたが、今は新型コロナウイルスから子どもを守るために、やむを得ず、テーブルをスクール形式にして同じ向きに並べ、少人数で読書やお弁当を食べるようにしている。室内よりは3密を防げるので、休校中の校庭で過ごせるのもありがたかった。最近、非常事態宣言解除後に一時休校していた学校も始まって、朝からの育成ではなくなった。子どもの出席も戻りつつある。しかし3密を防ぎ、衛生環境を整えるのに現場は苦労している。

この3月で、私は20年近く働いた学童保育所の支援員を退職した。東久留米市は東京の郊外にある人口11万人ほどの市で、まだ畑や緑も残る街に、13の小学校がある。その校庭の片隅に「学童」のプレハブの所舎が立っている。この10数年で、市内の「学童」もずいぶん変わった。就学人口減で小学校も3校が閉校となった。以下、その変化を追ってみる。

(1) 10数年前の学童保育所

かつては「学童」で犬を飼っていたという話をきいたことがある。カメやカナヘビは、その後も飼っていた。子どもが、草やぶで捕まえたヘビを入れる箱を貰いにきたこともある。父母会のキャンプやバザー、市内の「学童」の合同交流会もあった。みんな元気だった。

1年生の入所式、誕生日会、父母の日のプレゼント工作、親子交流会、七夕まつり、夏休みの工作やお楽しみ会、肝試し。敬老の日の葉書の投かん、遠足、クリスマス会。お正月、節分、ひなまつり、3年生の卒所式。季節の行事や工作の合間に、カレーライスなどの昼食作り。たくさんの取り組みがあった。

ふだんは、ドッチボールやキックベース、サッカー、天下とり。缶けりや「いるかの親子（チームで戦うじゃんけん鬼）」、落ち葉やどんぐり集め、縄跳び、鬼ごっこ、リレー、竹馬。セミとり、砂遊び、水遊び、水溜りでの泥んこ遊び。校庭でたくさん遊んだ。ドッチボールで、強い3年生のボールをキャッチできるようになったりなど、異年齢集団の「学童」ならではの成長の姿が見られた。

室内では、レゴやブロック、ドミノ、将棋、マンカラ、オセロ、トランプ、ウノ。ゲーム機こそないが、ケン玉やコマも人気で、空き箱を使った工作や、お絵かきやぬり絵も楽しまれていた。

子どもたちの楽しみのおやつ。3年生の班長が中心になってギューギューに座り、お菓子を分け合う。せんべいやクッキーばかりではない。そうめん、牛乳モチ、おかゆ、蒸しパン、フルーツヨーグルト。焼きそば、ふかしいも。2段ゼリー、リンゴや西瓜。手作りおやつも多かった。3年生は、1年生が言うことをきかないとこぼしながら、張り切っておやつ当番をしていた。平成の時代だったが、昭和がまだまだ残る「学童」生活だった。

(2) 最近の学童保育所

○利用者の増加と支援員の不足、民間委託もはじまる

「学童」の利用も年々増加し、入所待機児もずっと発生している。市でも増築や増設で、対応してきたが、2015年から対象が6年生までになったこともあって、なかなか「学童」の需要に追いつかない。4年ほど前からは、小学校の空き教室を「学童」の特別教室として利用させてもらっている「学童」も6校。利用できる曜日や時間、場所が変わる場合もあり、トイレが離れていたりして、環境を整えて運営するのに苦労している。

学校によっては、2つの「学童」プラス1つの特別教室を抱えている場合もある。平屋の第1学童に増築して、第2学童をつくったところもあれば、2階建て校舎の1階に「第1学童」、2階に「第2学童」等。それでも足りず、学校の空き教室を貸してもらったりしている場合も。

支援員の確保も、いつも悩みの種で、とくに、夏休みなどの「一日育成期間」は、時間が長いのに、臨時の職員がなかなか集まらない。4月からは、2校の「学童」の民間委託が始まった。育成時間も延長された。

○「学童」の日々

「学童」の半分を占めてしまいそうなたくさんの1年生。入学当初には、いろいろな事件が起こる。今日は自分が「学童」に行くかも分からず、お弁当を忘れてたり等々。すぐなじんで遊べる子どももたくさんいるが、「学童」の流れに立ち往生し、不安な気持ちをもってしまう子もいる。

保育園や幼稚園に送迎してもらっていた子どもが、学校へ自力で登校する。学校が終わると、教室の2～3倍はある「学童」に行くと、大きな怖そうなお兄さんもいる部屋で過ごさなければならぬ。ルールを破れば、先輩や先生からも注意される。大方の子どもは、お気に入りの居場所（好きな友だち、先生、遊び）を見つけ、夏休みを越えるが、落ち着けずに、保護者が勤務を調整したりして、学童をやめてしまう場合もある。

「学童」に慣れて、主張が強くなり行動力の増した多くの2年生を抱えながら、思春期の高学年まで、五月雨式に登所してくる子どもたちを毎日迎える。出席の確認や、遊びやおやつ、宿題、それぞれの降所をしっかりとやっていく。

しかし、出席のはずなのに、来ない子が毎日いる。学校の残り勉強、委員会や「放課後子供教室」に参加しているらしい。トラブルがあって話し合っていると、同級生からの情報もあったりする。なかなか学校から連絡は貰えないが、子どもの誤情報の場合もあり、げた箱をチェックしたりするが、個人情報保護のため名前を貼っていない場合もある。学校で具合が悪くなった場合は、学校で保護者のお迎えを待つのが基本だが、微熱等、少々の体調不良の場合は、保健室や担任の先生から連絡があって、登所してくる。「学童」で、また体調に注意し必要なら保護者に連絡する。お迎えの調整がなかなかつかない場合もある。所在が分からず保護者に連絡すると、連絡忘れだったこともしばしばで、一番困るのが、出席なのに帰ってしまった子の場合である。保護者に連絡して、所在を確認してもらおう。友だちのところに寄り道したりなど、行方が分からず、「学童」や学校が手分けして捜し、大騒ぎになることもある。言うまでもないが、子どもがどこでどう過ごしているか、安全かは、とりわけ大事なポイントである。降所の時間も同様で、毎日、変更の確認やらで何件も電話で連絡する。

「学童」の対象や人数が、増え、規模が拡大して、10数年前と同じ運営ではなくなってきた。おやつは、〇157の発生したあたりから、手作りよりも衛生に重点を移し、個包装のお菓子が増え、手作り昼食会はなくなった。日常の遊びも、毎日のように全員でしていた集団遊び（10～15分ほど）は、少なくなり、「学童児＝ドッチボールが上手」ではなくなっている。それでも毎日、校庭で遊び、汗を流して走りまわっている子どもたちは、同じように元気いっぱいだ。

○宿題、おやつ、子ども同士のトラブル、保護者のニーズ

学校から毎日のように出される宿題の取り組みも、子どもと家庭によって様々である。家で保護者と一緒にやるので、「学童」ではやらないことにしている家庭もあれば、6時まで「学童」で過ごし、家庭での食事や入浴などのスケジュールに余裕がないから、「学童」で済ませてくる約束の家庭もある。「学童」では、宿題の時間や場所を確保するようにしているし、保護者から要望があれば声かけもするが、子どもが遊びを優先する時は無理強いはいらない。また、学習の内容については教えない決まりで、分からなくて困っている時は、漢字辞典を貸し出したり、時には、まわりの友だちや上級生がヒントを出してくれる。どうしても分からない時は、家の人と考えるように伝える。学校の指導と違わないよう、また保護者に宿題が出来ていないことを分からせる。

「学童」の日常の流れの中で、それぞれの遊びを切り上げ、おやつや準備をするなど、集団生活を円滑に過ごすためのルーティン。年間を通して計画する行事や企画。どちらも、子ども一人ひとりの成長のためにも、集団をまとめ、さらに子どもが成長するためにも大切だ。

だが、自由が欲しい子、気が進まなくても来なければならない「学童」に、拘束感を持ってしま

う子も少なからずいる。学年が上がればなおさらである。子どもたちは、行事や課題、日々のルーティンにも拘束感を持つことがある。ふだんと違うことを楽しむにも工夫がいる。予定と違うだけで不満や不安が出る場合もある。自分のやりたいことが通らないと、荒れてしまったり、反対に、周りとは違う主張が出来ずに人に振り回されてしまったり、毎日が、トラブルの連続といってもいいくらいである。「ありがとう」と「ごめんね」があれば、争いは半減すると思うが、「仲直りの練習」を日々、重ねている子どもたちである。

保護者からの相談で多いのは、やはり友だちや上級生とのトラブルだろう。学童内での行き違いは、支援員やまわりの目につきやすく、その場で双方から話を聞き、その日のうちに解決できる場合が多い。納得し、仲直り出来ない時は待つことも大切にしている。強い憤りに話をきくと、以前からの悪循環があったり、学校からの続きであったりする。1年もたつと、ちょっとしたトラブルは減ってくる。保護者が自分の子どもの味方に立つのは自然なことだが、公平な、親の期待とはまた違っているかもしれない子どもの姿を親に知らせることも大切だと思われる。

○支援員の苦勞

支援員は、日々のルーティンとトラブル対応に動きがちである。子どもたちには、なかなか自分の気持ちを言葉にできず、まわりの状況や態度から気持ちを推しはからねなければならない場合も多い。しかし、まわりとうまくいかなくて、困って、荒れてしまう子ばかりではなく、控えめで埋もれてしまいそうな子、なかなか辛いことを言葉にできない子や、いつも良い子で、周りから頼られて、こちらこそありがとうと言いたい子のことも忘れてはならない。

最近、保護者の価値観や願いも一層多様になってきた。しかしどの親にも根底にあるのは子どもの幸福であり、「学童」への要望は、子どもが安心して過ごせる場所であることだろう。それは今も10年前も変わらない。しかし、多様な家庭環境で成長した子どもたちの価値観や幸福感の中身は違うし、経験も行動も実に様々である。その子どもたちの自由な時間や願いをも大切にするためにも、行事や企画の数を減らしたり、育成内容が検討されてきている。

〈おわりに〉

新型コロナウイルスのためばかりでなく、「学童」でも時代と共に様々な対応が必要となった。民間の「学童」も増えた。児童館だけではなく、「放課後子供教室」や子ども食堂もある。どの子どもの放課後にも、安全で安心で、多様な友だちとふれあい、よき成長のできる場が数多く用意されることを願っている。(了)

子ども研究ノート・・・・・・・・・・・・・・・・

小児在宅医療下にある子どもたち — そのWBの実現のために

吉野真弓（育英短期大学）

キーワード：医療的ケア、小児在宅医療、ウェルビーイング、家族支援

〈はじめに〉

子どもが重い病気になった時、日本では入院や通院で、医療を受けることができる。日本は誰もが医療を受けることが当たり前でできる社会であり、乳児死亡率が世界一低い国である。しかし医療の発達によって、生きることが可能となったために、他方では重い障害や病気を背負って生きる子どもたちも増加している。こうした重い病気や障害がある子どもたちは、これまでは病院での生

活を余儀なくさせられていた。例えば人工呼吸器が必要な子どもたちで、重症心身障害・脳性まひ・筋ジストロフィー・脊髄性筋萎縮症・二分脊椎などがある。とりわけ人工呼吸器をつけている子どもは、退院後に家庭に戻っても、呼吸管理や経管栄養など24時間体制のケアが必要である。

このように、退院後も在宅で医療が必要とされる子どもたちは「医療的ケア児」と呼ばれている。なお「医療的ケア」とは、生きていくために日常的に医療が必要な患者のために、医療者以外、例えば家族等がするケアのことを指す。例えば人工呼吸器の管理、気管切開部の管理、吸引、在宅酸素療法、胃ろう、経管栄養などが代表的な「医療的ケア」である。

〈在宅で医療的ケアを受けている子どもたち〉

医療的ケアを受けながら在宅で生活している子どもたちに医療等を提供することが、「小児在宅医療」ある。在宅医療は主として在宅医や訪問看護師が支えている。現在在宅で医療的ケアを受けている医療的ケア児は、推計1.8万人いるとされる。

人工呼吸器など高度な医療的な治療が必要な子どもたちは、かつては大きな病院に入院をして治療を受けていたが、現在はこのような重い障害や病気がある子どもは、生まれたときはNICU(集中治療室)や小児病棟にいるが、その後(家に帰った時の訓練を家族が受けた後で)家庭で生活する。当然、家庭での生活には、在宅で医療が受けられる環境が必要になる。在宅での医療は、在宅医1名と訪問看護師1名での訪問診療が多い。訪問看護師は地域の訪問看護ステーションから派遣され、医師は多くの場合、当番制のオンコールで、24時間対応となっている。

医療的ケア児には、歩くことができる医療的ケア児から、寝たきりの重症心身障害児まで、多様なレベルの子どもたちがいる。子どもはどの子も成長・発達していく存在であり、在宅の医療的ケア児も、医療以外にそのウェルビーイングが保障されなければならないのはむろんである。子どもの権利条約では、障害をもつ子どもはとくに守られる存在であると規定されているが、しかし、そうした子どもたちの存在の認識や子どもの生活への配慮は、現在は残念ながら社会的に十分とは言えない。

また子どもは様々な経験を通して成長・発達していく存在であり、そのための環境はとりわけ大切であるが、医療的ケアを受けている子どもの場合にも、そのウェルビーイングがとりわけ保障される必要がある。しかしそうした子どもたちの場合、近場の外出や遠くに遊びに行くことにも人手が必要であり、そうした機会をもたないことが多い。

〈医療的ケア児の在宅医療が可能となった背景〉

在宅での医療的ケアが可能となった要因としては、医療機器の進歩や簡易化また小型化など、医療機器の改良があげられる。それらによって、家庭において親の医療的なケアも容易になり、医療機器の軽量化小型化で、医療的ケアが必要な子どもたちの移動もより可能となったと言える。

しかしこうした子どもの家族は、子育てと介護を同時にしなければならない。しかしそうした子どもを在宅で育てる家族は、24時間、自分がその子どもの命を預かっているという緊張状態の中で生活している。今後も医療の発達によって、在宅医療を受ける子どもたちは増加するであろう。しかし現状では、とくに病気や障害をもつ子どもが在宅で生活し成長発達していくための十分な社会的環境が整っているとは言い難い。

平成28年の児童福祉法改定では「医療的ケア児」についての定義の中で、患児と家族への支援について行政が支援していくことが明記されたが、しかし小児在宅医療患者が増加してきているにもかかわらず、その家族に得られる支援は、地域によって偏りがあり、入浴サービス、訪問看護ステーション等の選択肢も少ない現状もある。また、レスパイトケア施設の不足、医療的ケア児の教育など、問題は山積みである。また、これまではこうした子どもたちの場合、学校は付き添いを原則としていたが、親の付き添いがなくても学校に通えることができる環境が整えられつつある。2020年4月から東京都では親の付き添いなしでも学校に通えることができることとなった。

また、24時間つづく育児と介護を担っている母親の負担軽減のためのレスパイトケアも急務と

される。小児在宅医療が抱える課題は、病気や障害を持っていても地域で暮らすことができる社会を実現することであろう。当該の子どもたちやその家族に、今後、子どものライフコースをみずえた支援をしていく必要があるのはむろんである。

〈「人工呼吸器をつけた子の親の会」による遠足の事例から〉

以下の事例は、数年前に筆者があるプログラムに参加して参与観察した記録からの医療的ケア児の外出の様子である。

障害を持つ患児や家族にとって、長時間の外出は、しばしば大きな困難を伴う。定期的な病院等への通院も、家族総出ですることもしばしばである。その結果、通院以外に外出の機会を持つことが少なくなる。しかし、外出や旅行は、家族にとってリフレッシュやレクリエーション、また休養のために、社会的には当たり前のことである。しかし人工呼吸器のバッテリーは患児の命綱であり、バッテリーが表示された性能通りに機能するかを、親は心配する。さらに、万全の準備を整えても雨天候が悪ければ、高度の電子機器を多く使用する子どもは外出が不可能になる。そして、外出困難な重症障害児とその家族のQOLの向上には、医師を始め、多くの人々の支援がとくに必要である。以下は筆者がこうしたプログラム（近郊への遠足）に同行して、子どもとその家族の様子を参与観察した記録の一部である。本事例は、その記録の本質を損なわない程度に加工してある。

1) 日程と参加者

20 x x 年に行われたプログラム（遠足）で、障害や病気をもった家族および親の会（人工呼吸器をつけた子の親の会）の遠足の参加者は、障害をもった子ども6名、そのきょうだい6名、家族付き添い19名。ボランティア：医師4名、看護師15名、ME技師1名、相談員1名であった。

2) A君とその家族の半日

A君の病名は先天性ミオパチーで、人工呼吸器を装着し経管栄養を行っている。両親が遠足に同行した。

10：00 現地集合、主催者の説明。

11：20 までは自由時間。外にも出られることになっている。

11：30 に昼食。休憩室もこの会の遠足のためにとってあり、そこで必要があれば電源をとれるように万全の準備がされている。

10：14 施設見学。はじめにA君と両親は、1階を少し見る。話かけると答えるロボットがあり、A君をロボットに近づける。母親が「こんにちは」としゃべると、ロボットが「こんにちは。どこからきたの」としゃべる。みんなで笑いあう。エレベーターで2階に行く。エレベーターは一般客も利用できる。

10：34 たんの吸引を母親と父親で行う。室内環境：冷房は22度に設定されている。2階はじゅうたんがしかれているが、床はバリアフリーで、スムーズに車椅子も移動できる。3人で宇宙飛行士の服の前で写真をとる。宇宙体験ができるコーナーで見学する。父親がA君に「ロケットが見える？」と話しかける。

10：48 A君の友だちとその家族がお互いの子どもの近況を語り合う。新しいバギーにしたこと、吸引機を申請したこと、電池のバッテリーの容量の話等々。この会が親同士の情報交換やストレス解消の場にもなっている。楽しそうな2家族の笑い声が周囲に響きわたる。ある母親は自分の近況を種々話す。

11：00 2家族で外に出る。ふつうのエレベーターは、通路やエレベーターの中がせまいため使いづらい。大きめの客用エレベーターも大型バギーが乗ると、1、2人しか補助者は乗れない。通常の手すりレベルでは、十分なスペースでも、重症度が高くなると使い勝手が悪い場合も出てくる。また、わずかな段差でも乗り降りを補助する人が必要になる。外に出る

ため1階玄関前で準備。子どもたちが、太陽に弱いため、日よけの傘と日焼け止めを塗る。たんの吸引をする。

外へは、スロープがありスムーズに出られる。目の前には池があり、散歩するには気持ちのいい場所。「病院の通院しか、外に出る機会がない」と、ある母親が言う。多くの子どもにとって、外に出る機会の少なさがわかる。このような遠足の企画は、子どもにとっても家族にとっても、非常に貴重な時間であろう。

11:15 たんの吸引

11:30 再集合して休憩室へ。休憩室に入る際に、ベット型の大型バギーでは、扉がせまく室内に入れないので、急遽バギーを廊下に残して、会議室の中で机を用いて簡易ベットを作る。

12:15 たんの吸引

たんの吸引は、20分から30分ごとに1回が必要であるが、親は手慣れた手つきで処置する。こうした医療的ケアを行うための場所や時間は制限されており、どの子どもや家族も外出が非常に困難である。

(当日の記録から一部を抜粋)

〈おわりに〉

重い病気や障害があったとしても、事例にみるようなプログラムによって、子どもの世界は大きく広がる。またこうした機会は、とかく母親のリフレッシュの視点でとらえられることが多いが、父親にとってもいいリフレッシュの機会となっていることを、この事例は示している。父親同士の情報交換、とくに車の情報交換などには、楽しそうな笑い声も聞こえており、お互いに打ち解けあって「また来たいね」などと話が出ていた。こうした活動で父親同士、今後とも、より深いつながりがもてるようになる可能性もありそうだ。子どものケアのためには、その背後にある家族全体への支援が必要なことを、この事例は示唆している。

在宅医療が必要な子どもたちの存在は、ともすれば忘れられがちだが、そのウェルビーイングを保障するためにも、こうしたプログラムとそのための設備の充実、家族支援等の一層の充実が求められる。(了)

注) 吉野真弓 平成17年度 在宅医療助成勇美財団 研究助成 完了報告書「[利用者が作る在宅ケアシステムの実証研究](#)」より一部抜粋して作成

会員談話室

会員自己紹介

○成澤布美子 (表現活動家・こども支援士)

NHK-FM「歌謡スクランブル」DJなど、フリーアナウンサー・放送作家として約20年間活動後、子育てを機に表現活動家として、子どものための演劇活動・市民活動を始めました。地域でご縁のあった劇作家・演出家ふじたあさや氏に師事しています。代表作は児童演劇の祖である川上貞奴を題材とした「[貞奴と呼ばれた女](#)」をふじた氏の演出にて脚本執筆、一人芝居公演。自閉症児を題材とした市民劇「大切な星を心にひとつ」脚本・演出など。現在は司会者、役者、脚本演出、ライター、表現・演劇ワークショップ講師と幅広く活動しています。今後の目標としては、子どもたちの心身ともに健全育成には、演劇教育が必要だと考え、尽力したいと思っています。

〈所属団体〉公益社団法人「日本児童青少年演劇協会」協会員、一般社団法人「日本演劇教育連盟」会員、「心に星を」市民プロジェクト代表

○石川恵美子（弁護士、[横浜マリン法律事務所](#)）

残暑お見舞い申し上げます。新型コロナウイルスで、裁判所は機能停止で失業中です！マスクから早く解放されたいです。でも自宅のベランダにはたくさんの花が咲いています。毎朝花がらをつみ、花たちが元気かどうか確認し、自分も健康で過ごそうと気持ちを新たにしています。みなさまもどうかつつがなくお過ごし下さい。

○佐藤有紀（[宮城県総合教育センター](#)指導主事）

このたび末席に加えていただきました佐藤有紀と申します。

本業（？）は小学校の教員ですが、2018年度は名取市教育委員会、2019年度から現在は宮城県総合教育センターで教員を対象とした研修に携わっております。

2014年度から2年間は県の児童相談所勤務も経験し、様々なこどもの姿に立場をかえながら関わってまいりました。教員であろうと児童指導員であろうと指導主事であろうと、時には制度の理不尽さに憤り、時には我が身の無力さに辟易し、それでも慕ってくれるこどものまなざしにまた頑張らなければと自分を奮い立たせる、その流れは変わりません。

現在は子どもに直接接する機会がほとんどないのが寂しい限りですが、現職教員大量離職後の大量採用初任教員（その初任がすでに我が子の年齢であるのですが）研修や、学びの入口でもある幼稚園・幼保連携型認定こども園の教員を対象とした研修を運営する中で、学びの連続性も意識した、「こどもを理解し受止める教員の育成」にむけて尽力しているところです。

コロナ禍で何をすることも力量を試されているような日々ですが、この時間がめぐり巡ってこどもの笑顔につながることを信じ、いくつになっても学ぶ心を忘れず歩んでいきたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

○森本芳子（元東京成徳高校教諭・上級教育カウンセラー）

振り返ると、カウンセリングを学んだ事によって、私は物事の捉え方が肯定的に変わり、自分の生き方も変わってきたように思っています。

最初にカウンセリングの勉強を始めたのは、上智大学カウンセリング研究所のカウンセラー養成講座でした。医師や看護師・教員など様々な職種の方々と出会い、刺激を受け視野を広げる事ができました。次に私学教育研究所では、教師のためのカウンセリング実践講座を、私学の校長先生や教頭先生方と、教員研修のスタッフとしてお手伝いさせて頂きました。そこでは、物事を掘り下げて考えていく事の重要性をご教示いただきました。さらに発達障害の子どもや保護者への具体的な対応策を学び、ご指導頂いた事で、多くのやんちゃな子どもたちが卒業して大学へ進学して行きました。また子どもへの虐待の対応については、東京養育家庭の会理事長さんからのご指導をいただき、大変わがままな子どもでしたが、なんとか卒業して大学へ進学することが出来ました。

どの事例も、私達高校教員だけではどうにもならず、多くの先生方と専門家のお力添えがなければ、とても対応できませんでした。そうした先生方のアドバイスとご支援をいただく事で、無事乗り越えられた事に深く感謝しています。そうしたご指導がいただけなかったら、どの事例も高校側としては、適切な対応が難しかったように思います。

こうして振り返ると、「人との出会い」は人生を大きく変えるかもしれないと思うようになりました。お世話になりご指導いただいた先生方には、深く感謝しております。ありがとうございました。「人は関係性の中で紡いでいく」を、日々の学校現場でのやりとりで実感した歳月でした。

句会 むさしの

○ノーモアを願ふ折鶴原爆忌

安田 勝彦

秋つばめ一筆書きの願い事

大広野さはさはさはと秋来る

今年の夏は、自粛自製の夏となりました。句会でもコロナ禍の句が多く寄せられましたが、私は、コロナ禍にまつわる句は作る気分になれませんでした。せめて句は自由に野山を駆け巡りたいと思ったからだと思います。暑い夏から目にはさやかに見えねども秋は静かに忍び寄ってくる季節でもあります。秋の気配を感じ取りながら大きく息を吸う昨今です。

○荒畑のいよよ濃くなる草いきれ

市原 潤

夏草の父の背丈を越えてゆく

稲の穂のあをあをとして夏ゆけり

先日亡くなった歌人岡井隆の若い頃の歌に「天皇を泣きて走れる夜の道の草いきれこそ頭(た)ちくるものを」があります。8月になると思い出す歌です。出穂のあと稲は頭をたれてゆく、8月の稲は秋の予兆です。

○力草と力比べの運動場

上島 博

指を折るほどで終わった夏休み

子どものころ、夏休み終わりに学校草引き作業の登校日がありました。踏まなくなった運動場は雌日芝(めひしば)、雄日芝(おひしば)、あらゆる雑草の天下です。雌日芝は比較的抜きやすいのだけれど、雄日芝の固さと言ったら……。運動場の乾いた土に太く丈夫な根でへばりついた草は、なかなか抜けません。力自慢が交代で挑戦し、ずこっと抜いた子は得意満面です。雄日芝はその固さゆえ「力草」とも呼ばれます。

2句目。よしだたくろうの「夏休み」に「指おり待ってた夏休み」という歌詞があります。指折り待った夏休みは、始まったら虫採り、花火、水遊び、数え切れない日々が続く特別な時間でした。今年の夏休みは2週間程度。指を一往復半ほど折り伸ばししたら、終わってしまいました。

「麦わら帽子は、もう消えた」……。

○何事もなかったように夏の山

三輪ひろ美

今年も行って参りました。軽井沢、人は少なかったですね。

浅間山は「夏ですが何か？」というくらい、悠然としておりました。動揺してばかりの私でしたが、「大切なことはそうそう変わるもんじゃない。粛々といきましょう！」そんな気持ちになりました。

2020年は異例づくめの1学期となりました。9月号の「風の便り」は、お2人のよき書き手を得て、オーバーに言えば、歴史に残る記録になるのではないのでしょうか。「風の便り」でも、これまでに「臨時便」を何通も発行して、みなさまにこの時期の学校をめぐる子どもたちの状況をお伝えしてきました。いま「ソーシャル・ディスタンス」とか、「3密を避ける」という語が世に飛び交っていますが、人との距離をとり、密を避けて、果たして「教育」が成り立つのでしょうか。幼稚園から、小中高校、大学、大学院までが、そうした環境の下で「人間形成(教育)」が出来るのでしょうか。オンライン授業と言えは聞こえはいいものの、いま教員たちはオール疲弊し、「人を作る、育てる」という、有史以来の私たちの営みは危機に瀕しています。むろんリモート方式で情報の伝達は可能でしょうし、現状ではこの方式しかないのかもしれませんが、しかし、みんなとの話し合いの中で自分の考えをまとめる。そうした学習の基本が欠落してしまう危機を感じます。残念ながら、コロナの支配はしばらく続くと思われ、後には物知りだがハートに欠ける「コロナ世代」が誕生するかもしれません。当りに思っていた「話し合う」ことの大事さをあらためて感じます。

12月号の「風の便り」の誌面はどうなっているのでしょうか。ひたすら悪霊退散を願う今日この頃です。みなさま、くれぐれもご愛ください。

(深谷和子：kazukofukaya@nifty.com)

〈編集委員〉

深谷和子(長)・湯浅俊夫・上島博・清文枝・土田雄一・大高志芳・吉野真弓・細江久美子

〈「風の便り」 2020年9月号目次〉

今月の花	夏の夕暮れを彩る「一夜花」	細江久美子
今月の詩	水に傷ついた子供のカシーダ	ゆあさとしお
実践報告 I	コロナ禍の学校生活	渥美卓哉
実践報告 II	東京の片隅の学童保育所から	山上和子
子ども研究ノート	小児在宅医療下にある子どもたち —そのWBの実現のために	吉野真弓
会員談話室		
会員自己紹介		成澤布美子 石川恵美子 佐藤有紀 森本芳子
句会 むさしの		安田勝彦 市原潤 上島博 三輪ひろ美



編集後記 (深谷和子)